

## パイデイア (IV)

——ギリシア文化を彩る理想の数々——

### ヘシオドス・ギリシアの農村生活

ポイオテイアのヘシオドスは、ギリシア人たちの間で、ホメロスに次いで登場した二番目に偉大な詩人であると囁かれていたが、かれの紹介する世界は、ホメロスの描いた貴族世界とまるで異なっていた。その『仕事と日々』は、今一つの『テオゴニア(神々の系譜)』よりのちに制作されて、前八世紀の終わり近くのギリシア本土で小作農たちが営んだ農村生活を生き活きと紹介していたが、それは、ホメロスを補完する上で欠くことのできないものであった。というのもホメロスは、初期のイオニア地方で一般民衆が営んだ生活などに一瞥も加えなかったからである。『仕事と日々』はしかし、ギリシア文化の発展を研究する上で、とりわけ重要な作品でもあった。ホメロスの詩は、貴族階級の理想——貴族や英雄にふさわしい資質を丹念に磨き上げる中で形造られていく——がこの世に登場した時点ですべての文化はスタートする、という基本事実を明かしてくれたが、ヘシオドスの方は、額に汗しての労働、という、文明の第二の基盤をわれわれに示してくれたからである。のちのギリシア人たちは、ヘシオドスの教訓詩を「仕事と日々」と名付けたけれども、こ

G・ハイエット  
村島義彦 訳

れなども、上の事実が了承されていたからにほかならない。ヒロイズムがひととき輝き出て、不朽の価値を蔵した徳の数々が存分に展開されるのは、何も、騎士がその敵と華々しく切り結ぶ中だけでなく、さまざまな条件や過酷な大地を相手に労働者がくり広げる静かで果てのない戦いにおいても、そうなのである。このように考えると、諸々の徳の間に「労働」を高く位置づける文化の発祥地はまさしくギリシアであった、という説も、まんざら根拠のないものとはいえない。われわれは、ホメロスに登場する貴族たちの気苦労のない優雅な生活に欺かれて、ギリシアという土地が、その住民にたえず過酷な労働を強いて止まなかった事実を忘れてはならない。歴史家のヘロドトスは、ギリシアの土地をいっそう豊かな土地や国々と比較して、この点をきつちりと確認した。かれの作品の登場人物の一人は、こう口走っている、「そもそもその窮乏は、ギリシアに先天的であるが、雄々しい徳の方は、後天的に獲得される。というのも後者は、過酷な法に対処する知恵から生み出されるのだから。ギリシアはこれまで、この徳を用いて窮乏と圧制からわが身を守ってきた」と。ギリシア自体は、丘の多い国で、多くの狭い谷をもち、それぞれの地域は山々で遮断され遠く隔てられていた。そこには、北ヨーロッパの

広々とした耕作に適した平野などほとんど見られなかった。住民たちも、その土壌からギリギリの生存を何とかもぎ取らないわけには、すなわち、土壌がもたらす最後の一片まで戦い取らないわけにはいかなかった。かれらは常にこう信じていた。わけても真実味のある重要な労働——それは、家畜を育て田畑を耕すことなのだ、と。航海がのちに主流となったのは、海岸に沿った地域に狭く限られていた。ギリシアは、初期の頃には、ひたすら農夫の国だったのである。

ヘシオドスはしかし、単に、ギリシアの農民生活のみを歌ったわけではない。かれの作品には、貴族の文化とその知的な感化力——つまりはホメロスの叙事詩——が、ギリシアの下層階級にどう働きかけたかも描かれていたからである。ギリシア文化は、上位の階級が他の階層群に押し付けた諸々の作法とか道徳などに尽きるわけではない。あまねく階層が、ギリシア文化にしかるべく貢献していた。そして、まことに粗野で鈍重な農民階級でさえ、貴族社会のいつそう華々しい文化に触れて、深く感化された。この時代に、そうした高貴な生活を世に布告したのは、ホメロスの叙事詩を朗唱した詩人（ラフソード）たちであった。ヘシオドスは、『神々の系譜（テオゴニア）』の有名な序章で、自分が「詩人」と呼ばれるに至った経緯を口にしてているが、それによると、かれは、ヘリコン山の麓で家畜の群れを育てる素朴な羊飼いであったが、ある時、ミューズの神々が訪れて靈感を吹き込み、詩人<sup>〃</sup>のシンボルともいべき杖を手渡した、とされている。新たに誕生したアスクラのこの詩人（ヘシオドス）は、しかしながら、耳を傾ける村人の群れに、ホメロスの叙事詩がもつ炎と煌き以上のものを囁いたのだった。かれの口から囁かれた思想は、旧来の農民生活という豊かな土壌に深く根を張っていた。そして、自らの経験が広まるにつれて、かれは、単なる「ホメリッド（ホメロスを語り伝える者）」としての職務を超えて、まさしく自分名義の詩人に成長

していったから、ミューズの神々も、かれに靈感を吹き込んで、労働の汗にまみれた農民生活の理想に立脚した永遠の詩を生み出させ、そうした理想を、ギリシア全体の精神的遺産に加え入れたのだった。

ヘシオドスは、ギリシア本土の平野部における生活をくつきりと描き出した。そうはいっても特定の地域は、その他の地域と大きく異なっている以上、ボイオティアを中心としたかれの説明内容をそう勝手に敷衍はできないのだが、それでも確かに、かれの伝える中身は、大きな意味でギリシア一般に当てはまり、それゆえ典型的とみなされて構わない。権力は、領地を所有する貴族たちの手に握られ、文化もまた、これら貴族たちの手で伝えられたのだが、農民たちは、自らに固有の生活をしつかりと営んで、知の面でも法の面でも、かなりの独立性をそれなりに保っていた。かれらは、田畑を耕して家畜を育てる自由民にほかならず、自らの労働が産み出したもので生活していた。農奴<sup>〃</sup>という言葉など耳にされなかったし、大移住時代に征服された種族から身を落とした民——たとえばラコニア（エスパルタ地方）のヘロットたち——が小作農である、などと告げる証拠も目にされなかった。こうした小作農民たちは、毎日、レスケー（市場）に集って公的な事柄も私的な事柄も遠慮なく論議した。かれらは、同胞たちの行為を、さらには貴族たちの行為をすら、いささかの制約もなく批判できた。そのような「人びとの口にする中身」——要するにペーメー（評判）——こそは、普通の人間が手にする特権と成功に深く影響した。あくまでも民衆の一部であつてこそ、当人は、座るべき場所と尊敬を勝ち取ることができた。

ヘシオドスはなぜ『仕事と日々』をまとめたのか。かれの語るところでは、怠け者で貪欲で訴訟好きな弟のペルセスが、あろうことか訴訟を企てた、というのが外的契機となっている。この弟は、自らの相続財産を使い果たすと、裁判官たちを買収して、ヘシオドスの取り分をめぐる

訴訟に勝利したのち、今や、新たな要求を片手に進み出てきた。訴訟とは、実のところ、暴力と正義の競い合いにほかならない。ヘシオドスしかし、訴訟など単なる特例でしかないかのようになり、これにはほとんど触れないで、ひたすら、同僚の農民たちの大半が抱いている一般感情のみを表明した。とはいえむろん、「贈与をむさぼる」貴族たちの果てしない貪欲と、手にした権力のあまりの濫用には、いささかも攻撃の手を緩めなかったのだが……。そのような貴族生活は、明らかに、ホメロスの叙事詩に描かれた家父長型の貴族たちのそれと著しく異なっていた。ともあれ、ここにもみる貴族たちの横暴と民衆の不満は、ヘシオドスの目の前に存在して疑う余地もなかったけれども、かれはしかし、ホメロスに登場する英雄たちは、まったく異なつた時代——『仕事と日々』でまことに暗く描かれた目下の「鉄の時代」よりいつそう善い時代——に生きていたのだ、と信じて疑わなかった。額に汗した民衆の味わう徹底したペシミズムを端的に描いたものとして、ヘシオドスの「人間がたどる五つの時代」の説明にまさるものを、他のどこにも目にすることはできない。そこでは、クロノスの支配する「金の時代」からはじまつて、銀の時代、青銅の時代、英雄の時代と徐々に降下の道をたどつて過酷な今日（つまりは鉄の時代）にいたり、ここでは、もやは正義も道徳も、さらには幸福すらどん底に喘いでいる、と記されていたからである。アイドス（恥じらいの女神）とネメシス（応報の女神）は、あまりの惨状に自らの顔を衣で覆つて、地上を放棄し、オリュンポスの神々の御許に帰つていった。死すべき人間には、みじめな不幸と果てのない争いのみを残しながら……

このような不愉快きわまる生活から、ホメロスの貴族たちが支配したいつそう幸せな世界で生まれた純粹な人間文化の理想など生まれようはずもなかった。われわれはだから、貴族社会の理想の数々が、国民全体

を包括した文化の型にまで発展していく中で、一般庶民は何を分担していたのか、を見つけ出さなくてはならない。この問いに答える手掛かりは、当時の田舎地方がまだ都市に十分には征服されていなかった、という事実に求められるだろう。古来の封建文化は、大きくは「土壤」にその基本を置いていた。田舎生活は、知的にみて「発展の下位」と同義でなく、その価値も、いまだ都市の基準で測られてはいなかった。「農民である」ことは「無教養」を意味しなかつたのである。当時は、都市——わけてもギリシア本土のそれ——ですら、基本的には田舎町の域を出ず、その大半は、こうした状態にくすぶつていた。郊外の田舎では、特有の道徳と思想と信仰が、すくすくと着実に生い育つていた。あまねく原野が途切れなく芝草や穀物を育むのと同じく、自らの育んだ作物として、そしてまた、その土壤に本当に適したものとして……。都市の圧力（＝蒸気ローラー）は、田舎に住む人びとの信仰や実践の中で希少価値のあるもの・個性的なものをすべて、いまだ平らに押し潰してはなかつたのである。

田舎において、いつそう高次の精神生活をリードしたのは、当然ながら、地主としてのお歴々であつた。ホメロスの叙事詩は、『イリアス』や『オデュッセイア』も示すように、そもそものはじめ、貴族たちの領地を巡回する吟遊詩人の口から歌い出されたのだが、ヘシオドス当人は、農民生活という田舎環境に育つて、農夫としての汗をひたすら流したにもかかわらず、専門の詩人となる前の若い頃から、ホメロスの詩には十分に通じていた。かれが相手にした公衆は、いうまでもなく小作農たちであつたが、かれらにしても、自分が用いるホメロスの「様式化された言語」を当然に知っているはずだ、とかれの方では決め込んでいた。小作農たちがホメロスの叙事詩を学んだ時、そこに、どのような精神的過程が展開されるかを、ヘシオドス自らの詩の構造が何よりも示してくれる

にちがいない。かれの詩は、当の本人がいかなる道のりを経て、文化的洗練にまで昇つていったかを如実に映し出していたからである。かれの扱う主題はすべて、おのずと、すでに確定済みのホメロスの定式に合致していた。その用語、言い回し、節の一部、ひいては節の全体ですら、しっかりとホメロスから借りられていた。ヘシオドスは、叙事詩に特有の美化された形容辞を用いているが、これも、ホメロスから学んだのであった。そのような借用を介して、新しい詩の中に、様式面と内容面での驚くべき差が生まれた。大地に縛りつけられて無味乾燥な生活をくりかえす農民たちは、なおも、自らの生半可な思想と抱負に、思慮に支えられた明晰と道徳的な確信——これのみが説得力に溢れた表現を可能にした——を何とか授けようとしたのだが、それには、これに先立って、いつそう上の階級のほとんど縁のない言葉使用とその理想に慣れておく必要があった。ヘシオドスの時代の小作農たちがホメロスの詩を知ったとき、かれらの手に、表現方法に関わる新たな莫大な蓄えがたつぷりと譲渡された。かれらが得たのは、しかし、これのみではなかった。次のようにも気付いたからである。ホメロスは、自分たちの地味な生活とは大いに異なつた、まことに英雄的で情緒豊かな色調に彩られているにもかかわらず、人間生活が抱える最大の問題を、わけても鋭くかつ明確に描き出してくれた。われわれはだから、そのような問題を介して、日々の生存に織り込まれた狭い争いの数々を超えて、さらに高次でさらに清浄な精神的気圏にまで昇つていく道を開示されるにちがいない……と。

ヘシオドスの詩は、さらに、ポイオテアアの農民たちに手渡された精神財として、ホメロスの外にどうしたものがあったかについても、かなりはつきりと教えてくれていた。『テオゴニア（神々の系譜）』の冒険譚的素材の豊かな鉱脈は、ホメロスを介してわれわれにも親しい多くのもの

を含んでいたが、そこには、他のどこにも登場しない古い伝承も数多く目にされたからである。もつとも、すでに詩の形にまとめられた神話（どこかに登場する）と、いまだ口から口に直接に伝えられるのみの神話（どこにも登場しない）は、必ずしも常にはつきりとは区分できない以上、そう気軽に「他のどこにも登場しない」などと口にしてはならないだろうが、ともあれ、ヘシオドスが『テオゴニア』で最もはつきりと示しているのは、創造的な思想家としての自らの力にはかならない。これに対して『仕事と日々』の中身は、農民の実生活にはるかに近く、創造的な工夫はほとんど盛られていない。もつとも、この作品でもかれは、突然に思考の繋がりを断ち切つて——聴衆もそれを喜んでくれると確信しながら——長い神話を口にしようとする。一般庶民も、貴族たちと同じく、神話には途方もない関心を抱いていたからで、神話は、かれらの心を揺り動かして、まことに長い思考と物語をせつせと紡がせた。神話には、かれらの生活哲学の全体がしっかりと要約されていたのである。ところで、ヘシオドスが本能的に行なう神話の選択には、農民に固有の見地が色濃く映し出されていた。かれの手で好んで選ばれたもの、それは明らかに、現実主義的で悲観主義的な農民の人生観を表明した、あるいは、かれを圧迫する社会的難局の原因を記述した神話の類であった。そうしたものとして具体的には、プロメテウスの物語や、世界がめぐる五つの時代の記述や、バンドラの神話などが挙げられるだろうか。「プロメテウスの物語」から、かれは、人間生活になぜ悩みや労苦が満ちているのか、に答える方途を見出したし、「世界がめぐる五つの時代の記述」は、農民の生存とホメロスの世界に描かれた輝く生活の途方もない差がどこから生まれたかを説明し、より善い世界に向けた人間の永遠の郷愁を映し出していたし、「バンドラの神話」は、世の婦人こそ諸悪の根源である、という——ホメロスの騎士的貴族の世界では未知の——酸っぱい散

文的な信仰を表明していたからである。ヘシオドスは、これらの物語を、自らの壮大な詩の社会的・哲学的な幅広い枠組みにきつちりと配置した最初の人間であって、この点に疑いはないにしても、だからといって、田舎の農民たちの間にそうした物語を広めた最初の人間ではなかった。こう仮定してほとんど問題がないのは、たとえば、プロメテウスやパンドラの物語が口にされる折にも、そうした物語がすでに聴衆に知られている、と想定されていたからである。ヘシオドスでは、ホメロスが好んだ英雄冒険譚への貴族的な愛よりも、宗教的・社会的な趣旨をもったこれらの神話への庶民的な興味の方が、はるかに勝っていた。神話は、人生に対する基本態度の表明にほかならないから、いかなる社会層であっても、自らの神話を欠くことはない。

一般農民の下には、その神話に並んで、さらに、名もなき労働者たちの連綿と続く世代がせつせと蓄えてきた、体験に基づく実践的な知恵の昔からの集積も認められた。そうした集積は、いくぶんは農業に関わる職業的知識から、またいくぶんは、道徳的な社会規則から出来あがっていて、すべては圧縮され、記憶しやすい簡潔な格言にまとめ上げられていた。そのような豊かな伝承を数多く含んでいたのが、ヘシオドスの『仕事と日々』にほかならない。このヘシオドスという人物とその経歴、さらには、当人の思想の発展等々を専門的に研究する学者なら、なるほど、この作品の第一節に登場する哲学的な深い省察からいつその益を得るかもしれないが、わけても見事な詩となると、やはり、諺がきつちりと詰め込まれた言い回し——その多くは独創的なスタイルで書き留められていた——に目を向けないわけにはいかない。『仕事と日々』の第二部には、農民生活を彩る伝承の数々が余さずに組み込まれていた。たとえば、どのように家を建て、どのように妻を娶ればよいかへの昔からの助言、四季に応じた野良仕事への訓示、衣替えと航海をめぐる助言をも含んだ

広い意味での気候ガイド、などである。これらはすべて、きびきびした道徳的な推奨（すべし）や禁止（すべからず）で始まり、かつ終わっていた。われわれはしかし、ヘシオドスの詩的な業績を語る方向に、少しばかり先走った気がしないでもない。この時点で為されるべきは、当人が語りかけた農民たちの文化そのものを分析すること、に尽きたからである。そのような文化はしかし、『仕事と日々』の第二部に、あえて分析するには及ばない程はつきりと表示されていた。そこにみられる様式、内容、構造は、これ自体が、一般の農民階級に受け継がれてきた遺産の一部であるのを明らかに物語っていた。それは、貴族階級が奉じる文化と著しいコントラストをみせている。ヘシオドスに登場する農民たちは、教育とか生活行為を考えるにあたって、人間らしい完全な人格——心と身体が見事に調和し、戦闘と弁舌（あるいは活動と歌舞）の双方に秀でた——といった騎士的な理想を、何ひとつ心に描かなかった。それに代わって尊ばれたのは、古来の道徳規則であって、それらは、容赦のない日々の労苦と、これに対応した農民の焦らず弛まない知恵に深く根ざしていたから、おのずと強い力も具えていた。こうした規則は、なるほど、高い理想を欠いていたかもしれないが、いつそう真実味にあふれ、いつそう大地に近かったのである。

ヘシオドスは、そのような異なる要素のすべてに「焦点」として作用する理想を導入し、これらを集約して叙事詩の形にまとめ上げたのだが、ここにいう理想こそ「正義」にほかならない。正義に対する情熱的な信仰は、わけても個人的な詩といわれる『仕事と日々』にしっかりと生命を吹き込んでいたが、当の信仰は要するに、実の弟がその勢力を拡大して裁判官たちを買収するなど数々の無法をはたらいた結果、ヘシオドスも、これに対抗して自らの権利を守るべく闘わなくてはならなかったから生まれた、といえるだろう。『仕事と日々』の何よりの真新しさは、著

者が、直接話法で語っている点にある。すなわち、正義には天恵がともない、不正には天罰がともなう」と告知するにあたり、当人は、叙事詩の伝統である間接話法を捨てて、あくまでも直接に舞台上に登場していた。このような様式の刷新については、その冒頭から、弟のペルセスとの論争を取り上げなくてはならなかった事情が挙げられるかもしれない。これは、弟に直接に語りかけ、あらゆる警告の雨を降らしている。すなわち、この世の裁判官がたとえ正義を拒もうとも、大神ゼウスはこれを保持して手離さないこと、しかも、不正に得られた財はいかなる繁栄も招かないことを、手を変え品を変え、この弟に納得させようと骨折っているのである。次いでかれは、大貴族である裁判官たちに向き直って、あるいは鷹と夜鳴き鶯の寓話を語りかけ、あるいは、その他の方法で訴えかけた。ところで、訴訟事件そのものは、読者に向けて驚くほどリアルに提示され、評決直前の瞬間も、驚くほど活き活きと再現されていたから、おそらくは、こう考える間違ひも犯されて当然かもしれない——ヘシオドスが実際に作品をまとめたのは、まさしくこの瞬間であって、『仕事と日々』は、そもその現場を描いた詩以外の何ものでもない、と。事実、近代の校訂者たちの多くは、誤って、このような見解を「まっとう」と推測したのだった。かれらの推測は、一見、ヘシオドス本人が自らの訴訟の結末を口にしていない、という事実によく適合しているようにも思われる。確かに、もしも訴訟が本当に決着していたなら、当人は、果たして聴衆を「未決着」の暗闇に放置しておいただろうか……。

こうした理由から、詩の内部に実際の決着の証拠を見つけ出して、ヘシオドス自身の立場が変化した重要なポイントのいくつかを跡付けようと、さまざまな試みがくり返されてきた。学者たちは、そのような変化が実際に発見されたと信じて、当の作品——実のところ、古代特有の構造的なゆるみを有して、われわれの感覚では、とうてい一個のまとまり

とは見なし難い——を分析し、これを区分けして、時間順に並べられた「ペルセスへの説諭」に仕立てたのだった。かれらはしかし、ヘシオドスの教訓詩にコメントするにあたり、実のところ、「ホメロスの叙事詩は数々の物語詩から出来上がっている」というラックマンの理論を転用しているにすぎない。そのような信念は、純粹に教訓的で、訴訟とは何らの関係もない、それでいてペルセスに語りかけられた、ここでの長い節——たとえば、水夫や農夫に向けた曆、互いに関係し合う二束の道徳的な格言群など——にはとうてい当てはまらない。ところで、この作品の第一部に登場する正義と不正をめぐる宗教的・道徳的な一般教義は、現実の訴訟とどう関わっているのだろうか。訴訟そのものは、明らかに、ヘシオドスの生活における重要事件であったものの、この具体的事実から出発しているのは、ひとえに、自らの教えに芸術的な風貌を与えて、リアルさと緊急さをまとわせたかたからにほかならない。このような工夫がなかったら、当の本人が登場して自らの教えを告知するのも、また、第一部における劇的な効果もともに不可能であったから、その意味で、ほとんど欠くべからざる芸術的工夫であった、と語られてよいだろう。ヘシオドスも、自らの闘いが「正義のため」であると実感し、これにしっかりと耐えていた。訴訟の結末は、つまりは記述されずに終わつたが、それもむべなるかな、実際の成り行きなど、詩自体に生命を吹き込む教義に何らの意味も持たなかったのであるから。

ホメロスは、英雄たちの争いやその苦悩を拡大して、天上と地上をひっくり返して演じられる一大ドラマにまとめ上げたけれども、ヘシオドスも、自らの些細な訴訟をドラマ化して、問題の「正義」をめぐって天と地の諸力がくり広げる壮大な戦いに仕上げ、これを介してさほど重要でない事柄を、権威と永遠性にあふれた叙事詩にまで高めたのだった。かれはしかし、ホメロスと違って、神々の会議やその活動を聴衆に示すことは

できない。自らを重んじる大神ゼウスの意思は、死すべき人間のあざかり知らぬところであつて、かれは、ひたすらゼウスに祈つて、わたしの権利を守つて下さいと嘆願するのみ……。『仕事と日々』は、それゆえ、神への賛歌と祈りでその幕を開ける。ゼウスは、尊大な人間を低めて慎ましい人間を高めたから、詩人は、裁判官たちの評決が公正になされるのを、この神に祈るのである。そうこうする内に、ヘシオドス自身が、地上における積極的な役割を担うにいたつて、かれは、罪を犯したペルセスに真理を語つて、不正と諍いが渦巻く『破滅の道』から何とか連れ出そうと骨折つてゐる。そしてこう口にする、エリス（鬭争）はまことに神であつて、人びとは、たとえ自らの意思を曲げてすら、この神を敬わなくてはならない、と。ところで、悪しきエリスの傍らには『善きエリス』もいて、こちらは、人びとを駆り立てて『諍い』でなく『競い合い』に向かわせた。この神は、ゼウスの計らいで世界の根元に住居を与えられ、ゆえに、持つものとしてなく怠惰に座すのみの人間でも、その隣人がせつせと働いて成功を収め、大きな繁栄を手にする姿を目にするに嫉妬に駆られて、つまるところ、この神の手で労働に赴いたのだつた。続いてヘシオドスは、悪しきエリスについてもペルセスに警告する。虚しい諍いに時間を費やせるのは、ひとえに、その穀物倉を満杯にして生計に思い煩う必要のない金持のみであつて、このような人間だけが、他人の財を奪い取ろうと計画し、結果として法廷で時間を浪費もできるのである、と。ヘシオドスは、このような道に二度と足を踏み入れてはならず、訴訟などあきらめて直ちに自分と和解するように、と弟を促した。かれらは、ずっと以前に継ぐべき遺産を区分けしていたが、ペルセスは、裁判官たちを買収して自らの正当な取り分以上を手にしたからである。「愚か者たちよ！かれらは、半分の方が全部よりいかに大きいかを、また、人が口にする安価な植物——ゼニアオイやスイセン——の中にどれ

ほどの祝福が込められているかを知らないのだ」。このような仕方では詩人は、実の弟への勧告を、具体的な事実のレベルから一般的な真理のレベルまで拡張して止まなかつた。ヘシオドスが、作品の第一部と第二部をいかにしっかりと結び付けていたかは、こうした序章（プロローグ）からも明らかにちがいない。第一部では、諍いと不正が固く戒められ、天は正しい主張を擁護なさるだろうと自信たつぷりに断言されていたし、第二部では、農夫と水夫の仕事の実際に加えて、何を為し何を避けるべきかを告げる道徳的格言が展開されていたからである。まっとうさと労働の連結——両部分をつなぎ合わせるこの環こそ、作品全体の中心テーマにほかならない。地上において、激しく迫りかかる嫉妬と諍いを手控えさせる唯一の力を求めるなら、おそらく、労働の場に和氣藹々とした競い合いをもたらす『善きエリス』を措いてないだろう。労働は、われわれ人間には辛い必然であるにしても避けては通れない。そして、ほんの僅かな生計しか保証しない労働に従事している人間でさえ、その労働を介して、他人の財を不当に貪る行為よりいつそう祝福されているのである。

ヘシオドスは、宇宙を統べる永遠の法に立脚してこのような人生哲学を樹ち立てたが、その法は、宗教用語を駆使し神話を散りばめつつ宣言されていた。もつとも、異なつた神話の数々を一つの普遍的な哲学で解釈づけようとする試みの端緒なら、ホメロスにも十分に辿られるけれども、すべての神話を整理して包括的な哲学体系にまとめ上げる営みにあえて手を染めたのは、ほかでもないヘシオドスであつて、そこに誕生したのが、今一つの大作ともいふべき『テオゴニア（神々の系譜）』であつた。かれは、宇宙論的・神学的な思索をめぐらす素材として、いうまでもなく、英雄の冒険譚を用いる術は知らなかつたが、神々の冒険譚ならかなり自由に用いる術を心得ていたし、事実、自由に用いてもいる。個々

の出来事のしかるべき原因を見出し出したという醒めた衝動に促されて、かれは、天界と地獄界のあまねく住民を網羅した巧妙な系統樹をこしらえ上げた。そして、ポツカリと口を空けた虚空としての「カオス」このカオスによって隔てられた世界の基盤と蓋いである「ガイア」と「ウラノス」、生命を生み出す宇宙的な力にはかならない「エロース」を神話的に記述したのだが、この中には、理知に貫かれた宇宙創成論を支える三つの本質要素がしっかりと目にされるにちがいない。「ガイア」と「ウラノス」は、世界を説明するこうした論には不可欠の要素であり、北欧の神話にも同じく登場する「カオス」は、明らかに、インド・ゲルマン種族に生来の観念であったが、ヘシオドスの「エロース」のみは、当人の手で生み出された哲学観念であって、この新たな観念はしかも後代に深い影響を及ぼして、そこでの思索活動を強く刺激することになった。神々と巨人族の戦いや、神々の王朝の歴史を描く際には、ヘシオドス自身、神学をまとめ上げる人間として振る舞って世界の発展を分かりやすく説明しているが、そこでは、自然界の土的な力と氣的な力に並んで、倫理的な諸力もしっかりと持ち場を保っていた。要するにかれは、人びとから祈りや犠牲を捧げられている各種の神々がどのように関係しているかを明らかにして、当時の宗教が扱う伝統的素材群を単に活用するだけでは満足しないで、どちらかというところ、最も広い意味での宗教に関わる事柄——たとえば儀式、神話、心理的体験など——を溶かし合わせて、世界の起源や人間生活の始まりも含み入れた大いなる歴史を、理知と想像力の双方を用いて書き上げる方向を選んだのだった。およそこのように、かれは、あらゆる活動的な力を「神的な力」として記述しているが、これ自体は、思想史の初期に固有の態度にはかならない。かれの哲学の特色は、何といってもやはり、諸々の神話と生きて働く神々を整然と体系化した点に求められるだろう。ヘシオドスは、このような

体系化のために著しく独創的な詩の様式を創造したが、その内には、当の体系化がしっかりと読み取れるにちがいない。かれの神話体系は、ところで、理知の手で形造られ、理知の手で支配されていた。そこには、ホメロスや儀式宗教からも周知の神々よりはるかに多い神々が含み込まれていたからである。この体系は、宗教的伝統の単なる一覧表や家系樹に狭く限定されるものでなく、古い神々を新たに解釈した創造的見解を含むと共に、斬新な擬人化を自在に導入して抽象思考に向けた新時代の衝動を見事に満足させてもいたのである。

ヘシオドスは、人間生活を彩る労苦と災厄がいかに避けがたいか、また、この世界にはどうして悪が存在するのか、を説明するために『仕事と日々』で諸々の神話を用いたけれども、そのような神話の背景を知ろうとすれば、以上の観察で十分ではないだろうか。そこに目にされるのは、導入部における善きエリスと悪しきエリスの記述でも見られたように、『神々の系譜』と『仕事と日々』が、主題を異にするにもかかわらず、詩人の中で決して切り離されていない点にちがいない。ヘシオドスの神学は、『仕事と日々』の倫理にしっかりと侵入し、かれの倫理的信念は、『神々の系譜』の神学をしっかりと染め上げていたからである。双方の作品には、同一人物の首尾一貫した世界像がくつきりと映し出されている。すなわち、『神々の系譜』は因果の発想で満たされ、ヘシオドスは、同じ発想を『仕事と日々』のプロメテウス物語でも活用して、『労働』という実際の道徳的で社会的な問題を解き明かしていた。労働と苦悩は、ある時期にこの世に登場したにちがいない。双方はしかし、神の定めた元々の「事物の完全な体系」に属しておらず、それがこの世に招き入れられたのは、道徳家として語るヘシオドスに耳を傾けるなら、天界から聖なる火を盗んだプロメテウスの破滅的行為を介して、であった。この行為を罰するべく、大神ゼウスは、最初の女性であり、あまね

く女性の母でもある悪賢いパンドラをお造りになった。そして、このパンドラが持参した箱から、病気や老年といったダイモンたちが、その他の数万にも及ぶ害悪——今日のあらゆる地とあらゆる海に住まう——と共に、この世に登場したのである。

ヘシオドスの大胆な筆致を介して、パンドラの神話は、このような中心の位置を手に入れ、さらには、このような新しい哲学的解釈も手にしたのだった。この神話は、『仕事と日々』の総括的枠組みにはめ込んで用いられているが、その点は、ホメロスの演説でも神話が、あくまでも手本として、すなわち、伝承から得られた奨励的ないし警告的見本として用いられているのとも軌を一にしているにちがいない。世の学者たちはしかし、あろうことか、二つの偉大な神話的「挿話」ないし「余談」が、なぜあえて『仕事と日々』に登場しているのかについて、本当の理由を正しく認識できなかった。当の作品の様式と内容を共に理解しようとすれば、そのような理由は見逃しえないはずであるのに……。『仕事と日々』は、まことに大規模な説諭タイプの演説であり奨励タイプの発言であつて、そうした意味では、テイルタイオスやソロンの哀歌と同じく、ホメロスの叙事詩に登場する演説の数々を、様式面でも色調面でも直接に継承していた。神話の実例は、このような演説に「打って付け」であつた。神話は、生きた有機体のように絶えざる変容と刷新をくり返して止まない。詩人は、そうした変容に手を貸して完結にまで導くのだが、それはしかし、当人の単なる気まぐれではなかつた。かれは、新しい生き方のモデルを創出して自らの時代に示したが、その際に神話は解釈し直され、このモデルの知見に合致させられたからである。神話そのものは、自らの中心的発想を絶えず変形させてはじめて、その命脈を保つことができるのだが、新たに生み出された発想はしかし、当の神話の不変の本体にしっかりと組み込まれなくてはならない。このことは、神話と詩人

がどう関係していたかを解き明かし、それは、ホメロスの叙事詩にも当てはまるものの、ヘシオドスに、さらに一層当てはまるにちがいない。かれの作品では、当人の個性と信仰がどうした効果を（神話に）及ぼしているかを跡付けられたからである。『神々の系譜』と『仕事と日々』では、詩人の個性が包み隠しなく現われて、自らの素材にはつきりと働きかけ、神話を、自らの知性と意思の道具として存分に活用していたのであるから……

ヘシオドスは、励ましの目的で神話を用いたが、この点は、『仕事と日々』に登場する二つの神話の二番手が紹介される際の姿勢からも、いっそう明らかではないだろうか。プロメテウス物語を告げたのち、かれは、直ちに方向を転じて「世界のたどる五つの時代」を語りはじめるのだが、その間には、ほとんど完全に様式を欠いた、しかしながら固有の深い意味を具えた簡単な対句がしっかりと挿入されていた。すなわちかれはこう語っている、「もしもお前が望むなら、今ひとつの物語を、注意と技巧を凝らして手短かに語ってやろう。これを、深く心に刻みつけておかななくてはならない！」と。このように、一番手の神話から二番手のそれに移行するにあたり、かれは、今一度ペルセスに語りかけているが、それは、ここでの二つの物語が一見すると互いに関わり合っているように映りながら、その実、同じ教訓的意図を担っていたのを改めて聴衆に思い出してもらいたかつたからである。最初に位置するのが金の時代で、それに続く四つの時代をへて人類はいっそう墮落していく、という歴史を介して訴えられているのは、つまるところ、人間の暮らしは元々は今よりも良く、そこには労苦も悩みも目にされなかつた、という点である。この歴史は、プロメテウス神話を説明する役割を担っていたのではないだろうか。ヘシオドスは、二つの神話が同時に共に「本当である」などありえない、という事実を見逃しているが、ここから浮かび上がってくる

のは、かれが、これらの神話は同じ発想を映し出した二つの異なった映像にすぎない、と考えていた点にちがいない。かれは、人間のいや増す不幸や、いや増す傲慢や愚かさの原因として、神々を畏れる心の消失、戦争、暴力沙汰の三つを指摘している。五番手の「鉄の時代」——ここに生きざるを得ない現実には、かれは大きな不満を漏らしている——にあつては、まさに力のみが正義となる。こうした時代に身を処していけるのは、それこそ悪人しかいない。ヘシオドスは次いで、三番手の物語を口にするのだが、それは、鷹と夜鳴き鷺の寓話であつた。そうした寓話は、いうまでもなく、有力な貴族からなる裁判官の面々に向けられていた。鷹は、捕獲した「歌い手」の夜鳴き鷺を鋭い鉤爪で空中高く運び去りながら、哀れに嘆く獲物に答えてこう語つた、「はじめな奴め、なぜ嘆くのだ？ お前は、いつそう強い者の手に落ちたのだから、どこに運ばれて行こうと黙つて従うほかはあるまい。そうと望めば、食うことも、あるいは解き放つてやることもできるのだぞ」と。ヘシオドスは、ここでの動物物語を「アイノス（寓話）」と呼んでいる。このような寓話は、つねに一般民衆に大きな人気を博して、かれらの手で用いられ、一般的な真理を表明する有効な手段となつていた。神話的実例が、そのような手段として叙事詩の語り手たちに頻繁に用いられたのと同じである。ホメロスとピンダロスは、自らの用いた神話的実例も「アイノス」と呼んでいた。この言葉はしかし、後代に至るまで、単なる動物寓話に限定されないで、先にも強調したように「助言」の意味も含んでいたのだつた。すなわち「アイノス」は、ただ単に、鷹と夜鳴き鷺をめぐる動物寓話に尽きるわけではなく、ヘシオドスの手で裁判官たちに与えられたお手柄でもあつた。プロメテウス神話と五つの時代のそれは、ともに、本當の意味での「アイノス」でもあつたわけである。

これに続く部分には、まことに強力な宗教効果を具えた一枚の絵が目

にされて、そこには、正しい都市と不正な都市が描かれていたが、それらは、正しさの上にとどのような「祝福」が憩い、不正にはどのような「呪い」が付き従うかを具体的に表示していた。ヘシオドスは、改めて二つの陣営——裁判官たちとペルセス——に語りかけているのである。そこでは、ダイケー（正義）が独立した神として描かれていた。ダイケーは大神ゼウスの娘であつて、父の傍らに座しつつ、不正が働かれた際には不満を漏らした。ゼウスの手で、そのような不正に報復してもらうためである。ゼウスの目はヘシオドス自身の町にも注がれ、そこで行われている訴訟を鋭く見張つていた。かれは、邪な主張が勝つのを許さないだろう。次いで詩人は、再びペルセスに向き直つてこう語つた、「これから述べるすべてを心にしっかりと焼き付けるがよい——正義の声に耳を傾けて、暴力沙汰を完全に忘れるのだ。これこそ、人類のためにゼウスが定めた道にはかならない。魚にせよ野獣にせよ、あるいは翼を具えた鳥にせよ、互いに食らい合うのを止めないが、それは、かれらの間に正義がないからだ。しかるに人間にのみ、ゼウスは、すべての中でも最高の善である。正義をお与えになつた」と。人間と獣にみるこのような違いは、明らかに、鷹と夜鳴き鷺をめぐる直喩にしっかりと結び付いていた。だからヘシオドスは、こう考えたのである——いやしくも人間なら、鷹が夜鳴き鷺にしたように、強者の正義など振りかざしてはならない、と。

この作品の第一部はおしなべて、正義の観念を生活の中心に据えた宗教的信仰で貫かれていたが、そのような哲学的発想は、いうまでもなく、たった一人の農夫の手で生み出されたわけもなく、その源もまた——ヘシオドスに登場する発想の様式に目を向けるなら——ギリシア本土に求めるのすらむずかしい。このような発想は、『神々の系譜』で壮麗な神体系を創り出した合理主義的理想と同じく、都市国家の文明とイオニアの進歩的思索を前提にしていたからである。そうした発想の最も古い源と

してわれわれに知られるのは、ホメロスにちがいない。かれの中には、正義への最初の賛辞が目になれたからである。もつとも、正義の理想は『イリアス』よりも『オデュッセイア』——時代的にはヘシオドスにいつそう近い——でより強く宣言されていたけれども。ホメロスで目にされる信仰の中身は、神々こそは正義の守護者であつて、そのかれらが、もしも最終的に不正よりも正義に勝たせないなら、神々の支配も本当の意味で「神的」というには当たらない、といったものであつた。このような要請は『オデュッセイア』の筋の全体を支配してゐるのではないだらうか。それだけではない。『イリアス』においても「パトロクロス物語（パトロクレイア）」の有名な直喩には、この地上で正義が蔑ろにされたなら、ゼウスは、はるか天上から怒りの嵐をお送りになる、という信仰が目になのである。とはいへ、時たま目にされる「神々を倫理的存在と捉える」こうした発想の足跡——ひいては『オデュッセイア』を支配している信仰——とヘシオドスの宗教的情熱の間には、途方もない距離が介在した。「正義の告知者」であるヘシオドスは、人びとの中にあつて、「ゼウスこそは正義の後見人である」という揺るぎない信仰に支えられ、同時代の連中に抗していささかも屈しない、そしてまた、数千年の時をへても、自らの信仰のパトスと力強さでわれわれの心を強く打つ「赤心の人士」だつたからである。かれが奉じる正義という理想の中身は——加えて、そうした中身を記述する独特の言い回しのいくつかも——ホメロスから借り受けられていたが、かれ固有のものもむろんあつて、たとえば、有無をいわさぬその力を当人も深く実感した改革者の熱意、さらにはその熱意が、天の支配と人間生活の意味といった固有の観念中でわけても目立つ点などは、そうした具体例にちがいない。これらを介して当人は、よりよい社会が正義を基盤として築き上げられる「新しい時代」の到来を告げる者となつた。ヘシオドスは、ゼウスの意思を「正義の観念

と重ね合わせるにあたり、具体的には、女神ディケーという新たな神を創造して、あらゆる神々の最高神であるゼウスの傍らに据えたのだが、この時のかれは、燃え上がる宗教的・道徳的な熱狂にしっかりと貫かれていた。そして、農村部や都市部に居を定める新興階級も、同じような熱狂に駆られて、新しい正義の理想を「救世主」として迎え入れたのだつた。

とはいへポイオティアの田舎地方は、イオニアの海岸部のように、思想上の新たな船出を見送る港になどならなかつた。ヘシオドスはだから、正義の理想を様式化し、この理想が自らの社会に吹き込んだそもそもの情念を表明した最初の人物とはみなしえない。「みなしえない」のだけれども、かれは、この理想を誰よりも深く実感していたから、これを告げる第一人者になることはできた。『仕事と日々』には、貧困の中に喘いでいた父親が、小アジアのアイオリア人の町キーマからどのようにポイオティアに移住したか、にも触れられているので、おそらく、論理的にこう仮定できるのではないだらうか。すなわち、一家の新居をめぐる灰色でくすんだ特徴——ヘシオドスの手で辛辣に描き出された——は、かれに先立つて父親が実感したものであつた、と。一家は、アスクラのみじめな貧村でほとんど寛ぎを覚えなかつた。ヘシオドスは、この村を評して「冬には不快で、夏には残酷な、およそよいという季節のない……」と語っている。明らかにかれは、若い頃から両親に学んで、批判的な醒めた目でポイオティアの生活や社会を眺める術を心得ていたにちがいない。かれこそは、そのような生活と社会に「正義」の観念を導入した最初の人物にほかならない。『神々の系譜』にも、ディケー（正義の女神）はしっかりと導入されていた。この作品の一節で、かれは、三体のモイラ（運命）と三体のカリス（美）に並んで、三体のホーラ（季節）——ディケー（正義）、エウノミア（秩序）、エイレーネー（平和）といった道徳の

女神たち——も据えていたのだが、この位置づけは、ホーラのためにわざわざ選ばれたにちがいない。ヘシオドスは、ノトス、ボレアス、ゼフェロスといった風たちの系図を示して、かれらが、水夫にも農夫にも等しくもたらず破滅の中身をくわしく説明しているが、それと同じく、これらの女神たちについても「人びとの労働」の面倒をみる得がたい存在として褒め称えていた。『仕事と日々』では、ヘシオドスの訴える正義の觀念が、農民の生活と思想のあらゆる局面にしっかりと浸透している。これは、ある強力な教育觀念に照らして農民の労働とその理想を秩序づける作品をまとめ上げたのだが、これも、正義そのものを労働に結び付けたからであった。われわれは今や、そうした教育觀念を、この作品の残余の構造を介して簡単に跡付けなくてはならない。

『仕事と日々』の第一部に幕を下ろす「正義にこそ従つて、不正からは永久に手を引くように」という警告に続いて、直ちにヘシオドスは、今一度弟に語りかける。そうした語りかけの箇所は、数千年にわたつて元の文脈とは切り離された形でくり返し引用されてきたが、それも当然で、これ自体は、これのみでも十分に詩人の名を不滅にする力を具えていた。すなわちかれは、暖かな愛想のよい態度を保ちつつも、父親的な優越感を湛えてこう切り出していたからである。「愚かしくて幼児に等しいベルセスよ、お前には、わたしの本当の知識に訴えて以下の点を告げてやろう。みじめな状態（カコテース）に陥ろうとすれば、並の群衆でも努力はいらない。その道は滑らかで、はるか遠くに横たわっているわけでもないからだ。けれども不死なる神々は、成功（アレテー）の前には汗を置きたもうた。これへの道は長くて険しく、最初は凹凸に覆われている。けれども頂上に至つたなら、そこからは、同じ汗をかくにしてもずっと楽になるはずだ」と。ここに用いられた原語の「カコテース」と「アレテー」を十全に訳そうとすれば、むろん、単なる「みじめさ」と「成功」

になど置き換えられないだろうが、それでも、この置き換えから学ばれてしかるべきは、二つのギリシア語が——のちのギリシア人やローマ人も理解したように——「悪徳」と「美德」といった道徳的資質をいささかも意味しなかつた点にちがいない。この箇所は、作品の第一部に登場した、よきエリスと悪しきエリスをめぐる冒頭の言葉を思い出させてくれるのではないだろうか。第一部ではヘシオドスは、聴衆に、諍いのもたらず災厄をありありと実感させたから、今や、労働の尊い価値をしっかりと示さなくてはならない。かれは「労働」を称賛して、なるほど困難ではあつてもアレテーにいたる唯一の道なのだ、と語っている。ここにいうアレテーは、各人に具わつた能力と、それがもたらす所産——繁栄、成功、名声など——をとともに包括していた。もつとも、ここでイメージされているのは、武勇に立脚した戦士貴族のアレテーでも、富に立脚した地主階級のアレテーでもなく、あくまでも額に汗して働く人間のアレテーであつて、それは、慎み深い性向の有無で検証された。そのようなアレテーこそ、本当の意味での『仕事と日々』ともいべきこの第二部を浮かび上がらせる標語にほかならない。労働の目ざすところは、一般庶民の理解するような「アレテー」を措いてない。庶民は、自らのアレテーを用いるべく相応しい場に赴くが、それは、貴族階級の奉じる規則が推奨するような、騎士的な武勇と喝采を野心的に競い合う場ではなく、労働の汗を静かに力強く競う合場であつた。庶民は、自らの額の汗を介して生計を立てなくてはならないが、これ自体は、災厄というよりも祝福であつた。アレテーを手にするには、自らの額の汗を介するほかはない。ここから明らかに読み取れるのは、ヘシオドスが、ホメロスに登場する英雄たちの貴族教育に対抗して、一般庶民のアレテーに立脚した労働者階級の教育理想を意図的に掲げている点であるだろう。正義と労働——これらこそ、そうした理想が樹ち立てられるべき基盤にほか

ならない。

そうしたアレテーは、しかし、本当に学ぶことができるのだろうか？ あらゆる倫理・教育体系の冒頭には、ほとんど例外なくこの問いが登場しているが、ヘシオドスは、それに答えて直ちにこう口にして、「自分ですべてを考察して、最終的に正しいであろう事柄を間違いなく見抜けるような人間、かれこそは最上であろうが、何が善かを告げる他者の言に素直に耳を傾ける人間も、これに次いでよいだろう。けれども、自分の力で理解もしなければ、他者の助言を心に刻みもしない人間、かれのみは処置なしの輩というほかはない」と。これらの言葉は、ヘシオドスが、労働の目ざすべき最終ゴールを「アレテー」と名付けたのち——しかも、別の教訓を与えようとする直前に——語られているだけに、まことに意義深い。ペルセスは——そしてまた詩人の言葉に耳を傾ける者は誰であれ——害となるのは何で、助けとなるのは何かを自らの心にはつきりと見て取れないなら、詩人の導きに素直に身を委ねなくてはならない。先の言葉は、ヘシオドスの教えの全体を本当の意味で正当化し意義づけていたから、のちの時代の哲学者も、自らの倫理・教育体系を公理化した最初のものとして、これを引用して憚らなかつた。すなわちアリストテレスは、倫理教育が立脚すべき正しい根底（アルケー）を論じた『ニコマコス倫理学』の序文において、これらをそっくり引用したのだった。このような事実は、『仕事と日々』の全体的枠組みの中でこれらがいかに機能していたか、を理解する一助となるにちがいない。ここでも重要になってくるのは、「理解」の問題であるだろう。ペルセス当人は、正しい洞察などまるで具えていないのだが、詩人は、そうしたかれでも教育可能であって、自らの確信を分け与えて当人の行為を感化するように努めるなら、おのずと「理解できる」はずだ、と仮定しないわけにはいかない。この作品の第一部は、第二部の手で蒔かれるだろう種を

育てる土壌を準備した。すなわち、真理のいや増す認識を妨げる偏見や誤解をそこから取り除いたのだった。われわれは、暴力沙汰や、諍いや、不正に訴えて自らのゴールに至ることはできない。われわれの努力は、本当に実を結ぶためには、すべからず、世界を支配する「大いなる意図」に合致してはなくてはならない。この点さえしつかりと心の中で理解されていたなら、そうした当人を教育して正しい道に気付かせるのは、他者にも出来ないわけではない。

このような一般の見解に続いて、ヘシオドスは、さらに別の実践的教訓も提示した。それらは、序文に語られた舞台装置におのずと収まりつつ、ともあれ、労働を褒め称える一連の格言から口火を切っていた。「だから、天の息子ペルセスよ、わたしの助言を心に刻んで、せつせと仕事の汗を流すのだ。そうすれば、飢えはお前を嫌い、逆に、髪に冠を頂いた慎み深いデメテルがお前を慈しんで、その穀物倉を豊かな飼葉で満たすだろう。……無為徒食の輩など、神々にも人びとも憎まれるほかはない。そうした輩の本性は、あの雄バチにも似て、怠けて座りながら働きバチの汗の結晶を食い漁るのみ。お前は、みずから望んで労働の汗を分かち持たなくてはならない。そうすれば、巡りくる季節がもたらす飼葉で、お前の穀物倉も満杯になるはずだ」。そして、こつも続けている、「働くことは恥ではない。むしろ怠惰こそが恥なのだ。せつせと働くなら、お前は、日ならずして豊かになるから、怠惰な輩は、すぐに羨みの目で眺めるだろう。名声にしろ栄光にしろ、つまりは豊かさに従う。もしもお前が、わたしの助言に耳を貸して自らの心得違いを改め、他人の富から自身の仕事に目を転じて、自らの生計に勤しみさえするなら、お前の立場では、ひたすら働く以外に道はない」と。次いでヘシオドスは、貧しさに伴う残忍な恥辱と二種類の富——神がお与えになる富と悪行に結び付いた富——について語り、さらには神々への義務、敬虔、財産を

めぐる一連の個別の格言にまで話を進めていく。加えてかれは、友や敵と、なかならずく親しい隣人といかに関係すべきか、すなわち、いかに与え、受け取り、救うべきか、わけても婦人について何を信じ・何を信じなくてはならないか、ひいては相続とまっとうな家族規模にも言及している。こうしたバラバラの教訓に続くのが、農夫と水夫が果たすべき義務をめぐる滔々とした記述で、これらも、別の格言群でしっかりと締め括られていた。そして、すべての終わりに、吉日と凶日をめぐる記述があった。これらの箇所の中身は、しかしながら、あえて分析するに及ぶまい。ポイオティアでは、農夫と水夫の職は、いまだ今日のように明確には切り離されず、かれらに向けた指図も、わけてもそうなっていて、それは、まことに実務的で詳細に互っていたから——いくら日々の生活と仕事の記述が魅力的であつても——ここで吟味するまでもなかったからである。ヘシオドスの手で描かれた生活の全体は、特有の美しさとリズムに貫かれ、そうした美しさとリズムは、当の生活が、変わることはない。自然の流れに直かに触れていたから導き出されたのであつた。第一部でかれは、社会正義と人間的正直をひたすらに要請し、不正に伴う破壊をせつせと描き出したが、これらを正当化するにあたって、ではいかなる方策を講じたか。ほかでもない、世界の底に認められる道徳秩序からこれらの事柄を導き出したのだつた。かくして第二部では、額に汗する人間の守るべき道徳は、当の本人が仕事の汗を流している。世界<sup>レ</sup>の自然秩序の上に築かれ、ここから、自らの力のすべてを汲み出している。ヘシオドス自身は、道徳秩序と自然秩序を区分していない。双方とも、かれの見たところ、大いなる神に源を発していた。人間がなす事柄はすべて——日々の仕事にせよ、はたまた他者や神々との関わりにせよ——目的をもった大いなる全体のしかるべき部分にほかならない。

すでに指摘しておいたように、この箇所を貫いて流れる人間体験の豊

かな流れは、深々と水を湛えた古えの民衆伝承にその源を発していた。静かで力強いこの河は、何世紀にも互つて地下に潜っていたが、ついに、『仕事と日々』を介して光の中に躍り出た。この作品をわけても深く突き動かしていたのは、啓示<sup>レ</sup>にほかならない。それは、啓示から自らの強い活力を汲み出して、その活力は、『イリアス』や『オデュッセイア』に多々みられる詩作の慣用をはるかに凌いでいた。『仕事と日々』は、われわれの前に、新たな世界<sup>レ</sup>を開示し、そこには、自然で人間的な愛らしさが満ち溢れていたが、これなど、ホメロスの叙事詩では例外に近く、二、三の直喩とか、アキレウスの盾を解説した地の部分にチラとしか目にされない。新たな世界を満たしていたのは、鋤で新しく耕された大地が発する芳しい香りであり、そこに響いていたのは、茂みから流れ出るカッコーの、田舎のんびりと仕事を誘う歌声であつた。これらはすべて、ヘレニズム期の学者連中や都市在住の詩人たちが好んで描いたロココ調の田園詩から、はるかに掛け離れていた。ヘシオドスは、田舎生活の全体をありありと描いてくれたのだつた。かれの掲げる正義の理想が土台としたのは、田舎生活と田舎仕事に彩られた古くからの自然な農民世界であつて、この理想の上に、さらにかれは、社会構造の全体を築き上げたのだつた。農民たちは、辛くて単調な自らの生存も、いつそう高次の理想に照らされると、すべて<sup>レ</sup>がいかに変容するかを如実に学んだから、これを介して農民世界は、不朽化され、強化され、再生された。この時点からかれらは、かつては自らの生活と文化のあまねく理想を学び取った貴族という特権階級に、妬みを覚える必要はなくなった。今や、自らの社会と自らの活動に、そして自らの重労働にさえ、いつそう高次の意義と狙いを見い出せたからである。

ヘシオドスの詩はこのように、これまで文化と教育を禁じられていた社会階層が、自らの可能性をリアルに開花させていく様を生き活きと紹

介してくれた。この階層は、その途上で、上流階級の文化と宮廷詩の気取った手法をしかるべく活用したが、自らの本当の内実とそのエートスだけは、自らの生活の深みから汲み出した。ホメロスの叙事詩に助けられて、まったく異なった階層の人びとも、その文化を生み出し、その人生目的を発見し、人生に内在する法さえ解き明かしたのだが、これは、ホメロスの叙事詩が特定階級の単なる詩でなく、貴族理想という根から出発しつつも、あまねく人間性を覆うまでに成長したからにほかならない。このこと自体、まことに偉大な事跡といえるのだが、さらに偉大なものがあつた。ほかでもない、このように自らの力を悟った農民は、置かれていた孤立状態を去って、ギリシア社会の他の集団に伍して自らの位置を入手できたからである。貴族階級の文化は、ホメロスの手でその精神エネルギーを高めたとき、あらゆる社会層に深く感化を及ぼしたけれども、農民の理想もそれと同じく、ヘシオドスの手で解釈付けられ、農民生活という狭い境界をはるかに超え出ていった。『仕事と日々』の身の大半は、なるほど、自作農と小作農にしかリアルかつ有益でなかったかもしれないが、それでもなお、農民生活の基本理想に普遍的意味を与えたのは間違いない。こう語ったからといって、むろん、ギリシア生活の「基本型」が農業文化の手で規定された、などと語っているわけではない。ギリシアの理想は、実のところ、都市国家が勃興してはじめて自らの個性的な形を最終的に手に入れ、それゆえ、農民の土着文化からほとんど影響は受けなかった。だからこそいっそう、ヘシオドスが、労働と正義の理想——農民階級の間で形造られながら、大きく異なった社会的枠組みの中でもその力と意味をしっかりと保持していた——を述べ伝える予言者の地位に、ギリシア史を通してずっと留まり続けていたのは、重要この上ないのである。

ヘシオドスは、教師にして詩人であつたが、詩人としての力は、叙事

詩の様式に訴えた命令にも、また、扱われる素材の本性にも基づいたわけではない。かれの教訓詩を評して、のちの世代には「散文的」とも映る主題が、多少とも技術的なホメロス用語に訴えてまとめ上げられたにすぎない、などとコメントするなら、果たして、これ自体が「詩」といえるのか否か、まで疑わないわけにはいかない（古代の学者たちも、のちの教訓詩に同様の疑いを抱いた・・）。ヘシオドス当人は、しかしながら、こう実感していた。ギリシア人たちの教師であり、さらには予言者であること、これを措いて、詩人としてのわたしの使命などはない、と。かれと時代を同じくする人たちは、ホメロスこそ「第一の教師」であると考えていた。かれらには、この詩人——つまりはホメロスの吟唱詩——が及ぼす以上に高度な精神的感化など思い浮かべることもできなかった。いやしくも詩人であるなら、ホメロスの気高い言語を用いなくてはならず、そうでなければ、教えることも叶わなかった。ホメロスの教育的感化の凄さを、すべてのギリシア人が実感して承っていたからである。ヘシオドスは、ホメロスを継承したとき、詩一般が——単に教訓詩のみでなく——社会の絆を固めて文化を創り上げる点でいかにすぐれた力を發揮するか、を明示した。このような創造の力は、道徳的・実践的な教えを垂れようとする欲求より遙かに偉大なのだが、その源は、事物の真の本性を何とか見出し出してやろうとする詩人の決意にあつた。この決意は、自らの世界のすべてを深く捉える洞察に裏打ちされ、それに関わったすべてに新たな生命を与えたからである。古い社会秩序は、ヘシオドスの察知したところ、あまりの諍いと不正のために存亡の危機に晒されていた。かれはだから、この察知に基づいて、自分および同胞各人の生活がその上に築かれている「不可侵の基盤」に目を向けるようになった。人間生活の率直な本来的意味にまで貫き入る深い洞察——詩人を創り上げるのは、これを措いてない。そうした洞察力にとって、扱わ

れる主題が「散文的」であれ「韻文的」であれ、ほとんど問題はないのである。

ヘシオドスは、あくまでも一人称の形で当時の人びとに語りかけた、ギリシアで最初の詩人であった。そのゆえにかれは、いわゆる吟唱詩人——「栄光の語り手」であり冒険譚的伝承の解釈者——の地平を超えて、当時の実生活の赤裸々な現実とその抗争にまで筆を進めることもできた。かれ自身は、「世界がたどる五つの時代」の神話からも明らかのように、叙事詩に描かれた英雄たちの生活など単なる、理想化された過去にすぎないと感じていた。その神話では、そうした過去が目下の「鉄の時代」に対比されていたからである。当時の詩人は、人びとの生活に直接に働きかけようとせつせと汗を流したが、その中であつてヘシオドスは、「高貴な家柄であるから」とも「公に任命されたから」とも訴えないで、ひたすらに導き手としての役割を主張した最初の人物であつた。このような当人をイスラエルの予言者に対比すると、その点はいっそう鮮明に浮かび上がるし、これ自体、これまでも少なからず試みられていた。とはいへヘシオドスは、すぐれた洞察に支えられて自らの社会に語りかけたギリシアで最初の詩人であつたから、その声にじつと耳を傾けるなら、ギリシア文化がイスラエルといかに異なつていたかもおのずと認識されるのではないだろうか。ギリシア文化は、社会史における「新たな時代」をはつきりと特徴づけていた。ギリシア世界を特徴づける何よりの標識は、あくまでも「精神面での指導性」にあつたのだが、これは、われわれも目にしたように、ヘシオドスから始まつた。ミューズの女神たちが、ヘリコンの山麓でこの詩人に囁きかけたとき——その接近はリアルな宗教体験であつたと記されている——当の本人が感じ取つたのは、まぎれもなく本来の意味でのスピリット、つまりは「スピリトゥス」こと「神の息吹」であつた。そのミューズたちは、「ヘシオドスよ、

詩人になるのだ」と命じたとき、自らの霊能力をこう説明していた、「われわれは、真実にまがう数多くの嘘を語るすべも心得ているが、同時に、そう望むなら、まぎれもない真実を語るすべも心得ている」と。これ自体は、『神々の系譜』の序曲に目にされるが、ヘシオドスはさらに、『仕事と日々』の序曲でも、実の弟に向けて「お前には「真理」を告げてやるう」と宣していた。とはいへ「真理」を告げてやるうなどと宣するのは、ホメロスにみられない新しいスタイルで、ヘシオドスの詩に用いられる一人称様式も、いくぶんは、これに結び付いていたにちがいない。かれ自身は、ギリシアの「詩人＝予言者」として、世界の底に描かれた大いなる計画をしっかりと見抜く深い洞察を介して、過ちに悩む人びとを導いて正しい道に至らせようと努めたが、そうした人となりは、当人の言葉に堂々と浮かび上がつていたのであるまいか。

#### 訳者あとがき

ここに紹介する和訳は、W・Jaeger, PAIDEIA — Die Formung des Griechischen Menschen の英訳として有名な、G・Highet, PAIDEIA — the ideals of Greek culture —, Oxford, 1939 をテキストにしている。イエーガーを和訳する際に、独文特有の圧縮性と抽象性に本気で手こずつていたわたしは、この英訳の意識性と具体性にどれほど助けられたか分からない。ハイエットの英訳は、いわゆる訳本の域を超えて、それ自体が、見事に完結した一個の読み物であつた。

大学における外書講読のテキストに、たまたまこれを選んだ経緯もあつて、教室での講読に合わせて、あえて和訳をパソコンに入れてみたのだが、改めて読み返してみると、独文の原典訳とは違ったストーリーの滑らかさが目に付いて、比較の意味でも、思い切つて『紀要』に投稿

することにした。

同じ中身ながら、著者が変われば、こうも全体が、様変わり、するものだろうか。訳文自体が原典を超えることは、まず見られないものの、双方がしかし、限りなく接近する事態ならあながち皆無ともいえないだ

三四

ろう。そうした数少ない例外の一つが、ハイエットの英訳にちがいない。今回は、紙数の制約もあって、「ヘシオドス：ギリシアの農村生活」のみを掲載することにした。

(本学非常勤講師)